

カナダ オンタリオ州の小学校訪問から学ぶ（2） -日常生活の“隠れたカリキュラム”に気づく目を育む授業-

広木 正紀

(京都教育大学 名誉教授)

Some Information Obtained from Primary Schools, Ontario, Canada (1) - Classes Designed to Raise Awareness towards "Hidden Curricula" in Everyday Life -

Masanori HIROKI

2015年11月30日受理

抄録：「子ども達が無意識に持っている先入観」への気づきを促すことをテーマにした研究授業を、トロント大学附属実験学校で参観した。

2年生の授業では、「多くのおもちゃの実物を“男の子が遊ぶおもちゃ”と“女の子が遊ぶおもちゃ”に仕分ける作業」を、理由を尋ねながら、また体験を想起させながら子ども達に行わせていた。そのことを通して、「男らしさ・女らしさ」に関する子ども達の先入観に問題意識を喚起しようとしていた。

6年生の授業では、雑誌に載っている大量の様々な広告を調べ、「宣伝のために広告が取り上げている例や写真」と「社会の多様な現実」との隔たりや偏りを、文化・民族、男女の役割、家族構成、身体的特徴に着目し探す作業をさせていた。そのことを通して、「広告が発信している“隠れたメッセージ”」と、「それらがメッセージ受信者の先入的な価値観の形成に与える影響」について考えさせていた。

これらの授業は学び手が、環境が発している“隠れたメッセージ”に単に受動的に影響されるのではなく「その存在に気づいていき、自ら主体的なものの見方・考え方を育てていくこと」を支援する場づくりの事例として注目される。

キーワード： 隠れたカリキュラム、隠れたメッセージ、固定観念、授業づくり、トロント大学附属小学校、カナダ

筆者は、2008年3月、カナダ オンタリオ州の4つの小学校を訪問する機会を得た（表1）。本稿は、前報（3校における図書教育と算数教育の事例報告；広木 2015）に続く報告（オンタリオ州立トロント大学附属小学校における研究授業の参観報告）である。

表1. カナダ オンタリオ州の小学校訪問。
3月5日のゴシックの部分について本稿で報告する [4日と6日の部分は前報（広木 2015）で報告]。

日にち	訪問地	行動
2008年3月4日(火)	Mississauga (ミシサガ)	◇ 10:00-12:00、Thornwood Public School (277 Mississauga Valley Blvd., Mississauga) を訪問した。 ・ Ms.Nancy McDonald, Principal の概要説明を受けてから教諭 Ms.Alison Shiraishi の案内で授業および施設見学した。図書室では Librarian Ms.Patricia Chow の説明を受けた。
		◇ 12:30-14:15、Trelawny Public School (3420 Trelawny Circle, Mississauga) を訪問 ・ Mr.Hayato Tokue の担任する4年生クラスにおける算数の授業（教授者:Mr.Tokue）と、施設を見学した。 ・ 14:45-15:15Trelawny Public School に付設された幼稚園施設を見学した。
5日(水)	Toronto (トロント)	◇ 7:00-14:00、 トロント大学 子ども教育研究所 実験学校(Laboratory School, Institute of Child Study, University of Toronto) (45 Walmer Road, Toronto) を訪問した。 ・ この日はこの学校の 公開研究授業日 (Lesson Study Day) であった。 ・ Ms.Elizabeth Morley, Principal の概要説明を受けてから、Annie Chern, Co-ordinator の案内で授業（ 2年生の授業および6年生の授業 ）を参観し、施設を見学した。そのあと、授業後研究会に参加した。
6日(木)	Toronto (トロント)	◇ 9:00-12:00、Westglen Junior Public School (40 Cowley Avenue, Etobicoke,Toronto) を訪問した。 ・ Ms.Jeanette Lang, Principal の概要説明を受けてから保護者ボランティア Ms. Tobi Thiessen の案内で授業および施設を見学した。図書室にはテントが張られ模擬キャンプが始まっていた。

Ⅰ. 参観校について

参観したトロント大学附属小学校（英名 Laboratory School, Institute of Child Study, University of Toronto、直訳はトロント大学 子ども研究所 実験学校）はトロント大学 子ども研究所（ICS: Institute of Child Study, University of Toronto）の一部門である。

トロント大学 子ども研究所についての概要は、研究授業当日の配布資料で、次の囲み内のように説明されている。

トロント大学 子ども研究所 (ICS: Institute of Child Study, University of Toronto) について

1. 研究所の目的は、子どもの発達と早期教育に関する学際的な研究の促進。
2. ICS を構成する3要素 … 次の1),2),3)の3つ。
 - 1) 教師教育プログラム … 修士号とオンタリオ州教師資格取得を結びつけたユニークな2年間のプログラム
 - 2) 実験学校 (the Laboratory School)
 - ・3歳から12歳までの約200人の子どもが在籍。
 - ・実験学校の教育プログラムの基本理念 … 子ども達の活動的な本性を認め、彼らの好奇心と創造性の育成を図ること
 - ・教育内容 (THE ACADEMIC PROGRAM -Goals and Expectations-)
 - ① Language Arts
 - ② Mathematics
 - ③ Science and Technology
 - ④ Social Studies
 - ⑤ The Arts
 - ⑥ Physical Education
 - ⑦ French
 - 3) 研究の場
 - ・研究所 (ICS) は、そこに所属する研究者、大学他学部の研究者、および実験学校の教師に研究の場を提供しており、子どもの教育に関する修士課程プログラムに登録している現職教員等にとって研究の拠り所になっている。
 - ・研究所 (ICS) は、そこに所属する研究者、大学他学部の研究者、実験学校の教師、また子どもの教育に関する修士課程プログラムに登録している現職教員等に研究の場を提供している。

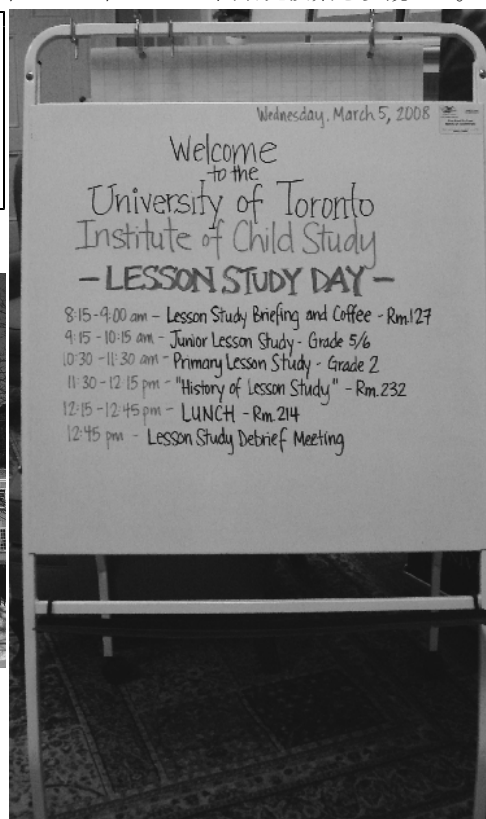
Ⅱ. 授業の参観

2008年3月5日(水)7:00-14:00にトロント大学附属小学校の2年生と6年生*の公開研究授業を参観した。

* 2年生 (Grade 2) は誕生日までは7歳、誕生日が来ると8歳になる子ども達。6年生 (Grade 6) は誕生日までは11歳、誕生日が来ると12歳になる子ども達 (学校の年度は9月から翌年8月まで)。
 なお、オンタリオ州の義務教育は Grade 1-10 で、年令としては日本の小1～高1に、初等教育 (Elementary Education) は Grade 1-8 で日本の小1～中2に、また中等教育 (Secondary Education) は Grade 9～12 で、日本の中3～高3に、それぞれ該当する (Ontario Ministry of Education ウェブサイト、自治体国際化協会 2007)



写真1. 訪問当日 (2008年3月5日)、積雪の中のトロント大学附属小学校 (上の写真; 写真中の日付は日本時間) と、玄関に置かれたプログラムの立て看板 (右の写真)。



授業に先立ち、参観者 (約 20 人) に、授業案が配布された (写真 2 参照)。

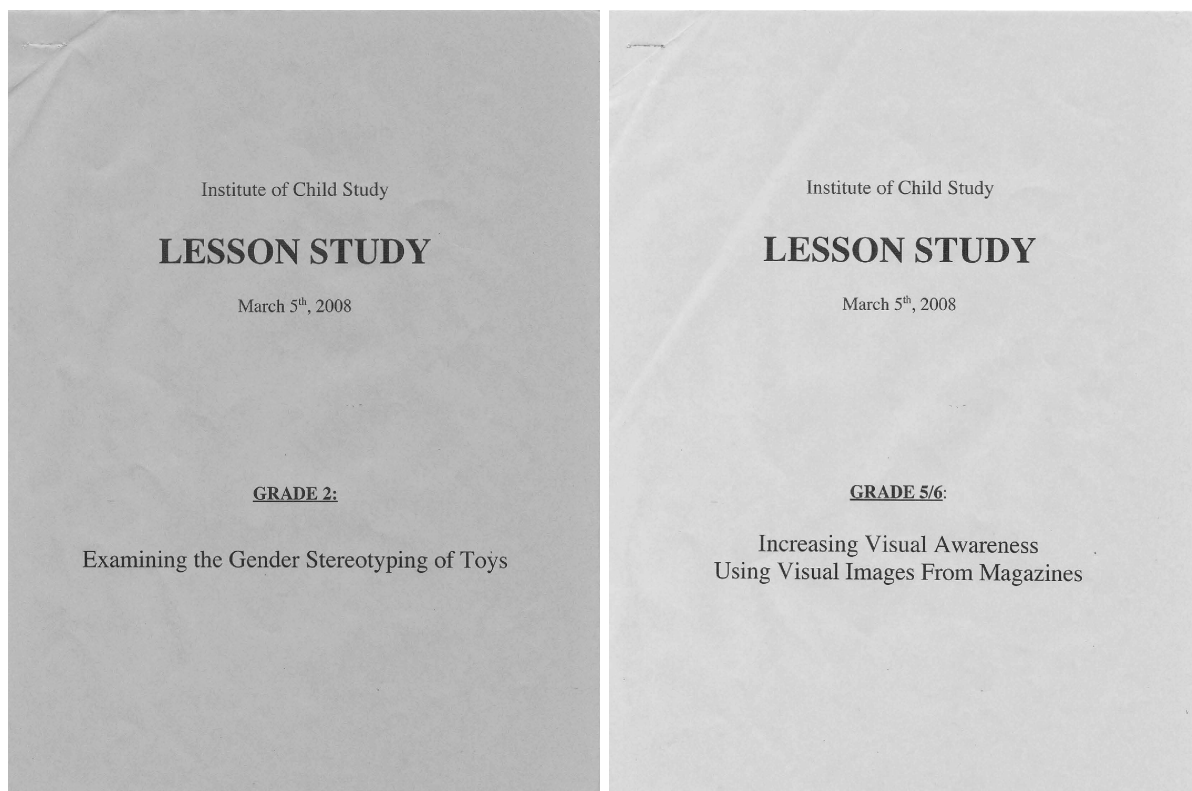


写真 2. 参観者に配布された授業案 (A4 版冊子) の表紙。左は 2 年生の授業用 (6 ページ)。右は 5・6 年生の授業用 (5 ページ ; 実際に参観したのは 6 年生の授業)。

1. [2 年生の授業] 授業テーマ: おもちゃに関する性別固定観念を再考する

1) 授業案 [参観者配布用 (A4 版 6 ページ) を筆者が和訳]

<p>小学校 2 年生 おもちゃに関する性別固定観念を再考する</p> <p>Julie Comay, Norah L'Espérance, Richard Messina, Renee Smith, Krista Spence, Carol Stephensen, Rheanne Stevens, Alexandra Koscianski, Gee-Jun Fou-Tsang, Julia Forgie, Sumika Motoki</p> <p>クラス: ノラ学級 (2 年生、12 人) [Norah's Grade Two Students (12 children)]</p> <p>教師: Norah L'Espérance</p> <p>材料: おもちゃ 一式 フープ (直径 1 m 前後) 2 個 ベン図 (Venn diagram) ** の書かれている紙 6 枚 ** ベン図については図 1 (後掲) 参照 それぞれのおもちゃが描かれたカード 6 セット スティック糊</p>
<p>はじめに この授業までの経緯</p> <p>子ども達は早くから、この社会で、何が男らしく、何が女らしいかを学んでいく。彼らは、いろいろな活動、場面、激励、落胆、顕在行動、潜在的示唆、様々な形のガイダンスを通して、男女の役割が社会的にどうとらえられているかを体験する。</p> <p>男の子はピンクの服を着ないとか、女の子は丁寧に礼儀正しく振る舞うなどという通念が有るか否かはさて</p>

おき、子ども達が、男らしさ・女らしさについて偏った固定観念に出会わずに大人に成ることは困難である。子ども達は成長過程で、性に関わる固定観念にさらされ、少年期・青年期を通し、生活場面での諸要因によって強化され続ける。

男らしさ・女らしさについて、子ども達に健全な見方を育てていくよう支援することは、私達教師の役割である。

子ども教育研究所(The Institute of Child Study)では、幼い子ども達が主体的に友達と関わりながら遊べる機会を多く設けている。そこにおいて、私達のチームは、男の子向きとも女の子向きともみなせるおもちゃを、子ども達が自由に関われるように用意した。

私達の議論の中で、「男の子だけのおもちゃ」、「女の子だけのおもちゃ」と子ども達が思うおもちゃはあるのだろうか、ということが話題になってきた。また、子ども達はどのくらいの年齢から男女の役割を意識し出すのだろうかということも私達の関心事である。

授業の概要

本授業では、2年生の子ども達がいろいろなおもちゃの写真カードを、ベン図を使って「女の子のおもちゃ」「男の子のおもちゃ」「両方のおもちゃ」の各区画に分類する。彼らは最初2人ずつのペアで、各おもちゃをどの区画に置くかを議論する。その後、各ペアの結論を全員の前に出し合って議論を深める。

子ども達の、本授業に先立つ活動経験

この授業に先立ち、2年生の子ども達はベン図を使った活動を行っている。また、彼らは、写真カードに写っているおもちゃについては、それらで実際に遊んでおり、馴れ親しんでいると思われる。

4歳児クラス、5歳児クラス、2年生クラス、5・6年生の調査

性にかかわる固定観念は、「性にかかわる行動と特徴についての知識表現や思い」と定義される(Ashmore & Del Boca 1979)。私達の学校における性にかかわる固定観念の現れ方を知るため、幼稚園の4歳児クラス、5歳児クラス、小学校の2年生、5年生、6年生の子ども達について調査した。各学年の子ども達に、いろいろなおもちゃについて「女の子のものか」「男の子のものか」「両方のものか」を尋ねた。

幼稚園児では、4歳児クラス、5歳児クラスのいずれにおいても、おもちゃをいずれかの性のものと決めている子ども達が目立つ。しかし、子ども達どうしが議論する中で、おもちゃの多くは、性に依らずに遊ぶということを知り、中間の「両方のおもちゃや遊び」の区画に収まってくる。「女の子のおもちゃか」「男の子のおもちゃか」の観念を左右している主要因はそれぞれの子どもの自身の経験であると思われ、1つのおもちゃについても、子どもによって反応が異なる。子ども達の観念は、誰かほかの男の子や女の子がそのおもちゃで実際に遊んだことのあることを聞くことによってしばしば変えられる。

2年生の子ども達は、幼稚園の5歳児クラスと同じおもちゃで、同じ課題を与えられた。この学年の子ども達は、男の子のおもちゃだとか女の子のおもちゃだとか、口に出して言うことが多い。そしてこの類の発言は、中間の区画に分類されるおもちゃの場合よりも、断定的であることが多い。2年生の子ども達は2歳か3歳だけ若い子ども達よりも、強化された観念を持ち、強く反応する。すなわち、どちらかの性のものと決める場合が多い。

一方、5・6年生の子ども達は、一人一人がベン図を描き、図に、女の子のおもちゃ・遊び、男の子のおもちゃ・遊び、重なる遊びを書き入れていった。多くの項目は、男の子か女の子かの一方にだけ書き入れられた。

人形は女の子のものとして、乗用車やトラックは男の子のものとして書き入れられた。また、多くの子どもは、塗り絵や着せ替えごっこは女の子、工作は男の子とする場合が多かった。

この活動のあとの討論で、これは昔からの因襲だということは分かっているけれど、子ども達の遊びの現実でもあると述べていた。子ども達のこのような様子から、子ども時代の「性に関わる観念の強化」について考えさせられる。

文献

Walpert, Ellen. 1998 "Redefining the Norm: Early Childhood Anti-Bias Strategies." In Lee, E. & D. Menkart & M. Okazawa-Rey, eds. *Beyond Heroes and Holidays: A Practical Guide to K-12 Anti-Racist, Multicultural Education and Staff Development*, Washington DC: NECA.

目的

子ども達が、遊びについての性にかかわる偏見や固定観念について振り返り、再考することの支援

授業計画

2年生、児童数12人、40分

導入：

教師は子ども達に、女の子のおもちゃと男の子のおもちゃについて、みんながどう考えているかを知りたい、と話す。子ども達にバスケットに入ったおもちゃ一式を見せ、ペア(2人1組)で、これらのおもちゃの写真を、ベン図に分類するように言う。教師は、彼らがこのベン図について理解しているかどうかを手早くチェックした上、活動場所である机に移動させる。各ペアは、ベン図の書かれた紙1枚と写真カード1セットを持つ。彼らは2人で、各写真カードがベン図のどこに行くかを決める。[注：各ペア内での議論が、有益な情報となる。]

ペア活動後の振り返り：

子ども達を、自分たちのベン図を持って再度カーペットの所に集合させ、活動を通して思ったことを尋ねる（2人の考えはすぐ決まった？ 難しかった？ 決めるのにどんなことを思った？）。また、自分たちのベン図を他のペアのベン図と比べよう促す。

クラス全体の共通理解へ - 一緒におもちゃを分類する：

教師は2つの輪（hoop フープ）がベン図になるように床（カーペット）の上に置き、おもちゃ（実物）の入ったバスケットを持ってくる。それからバスケットからおもちゃをひとつずつ取り上げ、それぞれのペアがベン図のどこに置いたかを尋ねる。教師は、子ども達の発言を聞いて、意見の一致したおもちゃを、2つの輪でつくったベン図に置いていく。

次に、教師は意見の一致しなかったおもちゃについて尋ねる。教師は彼らがどのように考えた理由を尋ねる。もし子ども達が、そのおもちゃで男の子も女の子も遊んでいるという事例を示したら、教師はそのおもちゃは「男の子と女の子の両方」のカテゴリーに入ることを提案する。[注：もし、未決定のおもちゃがたくさんあり、時間が十分無い場合は、全てのおもちゃについて議論することはせずに、先へ進む。]

教師は、殆どのおもちゃは「男の子と女の子の両方」の所に入ることを述べるようになる。どのおもちゃについても、子ども達の誰かが遊んだことがあることを確認できるであろう。

子ども達の思考を探る - 多様性の受け入れ/固定観念への挑戦：

教師は男の子だけのおもちゃ或いは女の子だけのおもちゃと言えるおもちゃについて尋ねる。教師はその理由を尋ねる。さらに、次のように追及する（質問攻めにする）。

- ◇ そのおもちゃで男の子/女の子が遊んだら変ですか？
- ◇ そのおもちゃで男の子/女の子が遊んだらどんなことになりますか？
- ◇ そのおもちゃで男の子/女の子が遊ぶことが許されないということがあってもよいですか？
- ◇ もしあなたが男の子/女の子で、あなたがそのおもちゃで遊びたい場合、あなたはどのように思いますか？
そのようなことはこれまでになかったですか？
- ◇ もし誰かが、それは男の子/女の子だけのおもちゃだからあなたはそのおもちゃで遊ぶことができないと言ったら、あなたは何と言いますか？

教師は、子どもの発言によっては、「なぜそれ（女の子が女の子ののではないおもちゃで遊ぶことなど）がだめなの？」と尋ねることもできよう。もし、あるおもちゃに関して、男の子も女の子も遊ぶのを見たとか、興味を持っている例を知っているという発言が子ども達の中からあった場合、教師は、そのおもちゃは「男の子と女の子の両方」のカテゴリーに入る、あるいは男の子が遊んでも女の子が遊んでもよいと言ってよいであろう。

もし子ども達が全部のおもちゃを「男の子と女の子の両方」のカテゴリーに分類したら：

教師は子ども達に、どのように考えてそうしたかを尋ねる。さらに、幼稚園の5歳児クラスの子ども達は、自動車を男の子だけのおもちゃのところに、指人形は女の子だけのおもちゃのところに置いたことを話し、彼らがなぜそうしたか、またそのようにした彼らに対し、あなた達は何と言うかを尋ねる。

しめくくり：

最後に教師は、「どの子にも自分が遊びたいと思うおもちゃを用意したいと思っています。きょうは、みんな一緒に考えてくれてありがとう」と述べる。

参観の方々へ：

授業時間中は、子ども達の後ろに座ってあるいは立って観察し、子ども達に話しかけたり、彼らの活動を妨げる行為はご遠慮下さい。

以下、参観の記録にお使ください**授業の前半：ペアでの子ども達の活動の様子**

観察の観点例（参考）：

ペアは男-男、女-女、男-女のいずれであったか

ペアの中でどんな議論がなされていたか

2人の意見が一致しなかったとき、どんな理由や、事実が挙げられていたか

おもちゃをどこに置くかについて、考えの変化がみられたかどうか

授業の後半：グループでの子ども達の活動の様子

観察の観点例（参考）：

どんな議論がなされていたか

ある考えの発言が支配的、ということがあったか否か

考え方の傾向に、男女間で違いがあったかどうか

考え方に何らかの変化が見られたか。もしそうなら、何が変化させた原因だと思われるか

1) 授業展開の概要

児童数は、授業案には12人とあるが、出席児童数は10人（男4人、女6人）であった。

- ① 子どもたちは5組のペア（男-男2組、女-女3組）に分かれ、用意されたおもちゃの写真カードを見て、「男の子の遊びに使うおもちゃか、女の子の遊びに使うおもちゃか」を判断し、ベン図の3区画に分けていった（図1参照）。

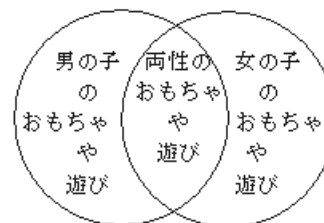


図1. ベン図 (Venn Diagram) による分類

- ② ペアでの活動を踏まえ、クラス全体の授業に移った。そこでは、教師が、全体に対しておもちゃの実物を順次見せ、「男の子の遊びに使うおもちゃか、女の子の遊びに使うおもちゃか」と聞き、「そう考える理由」を尋ねていった。

◇子ども達の答えに従い、おもちゃを、ベン図の3区画（2個の同サイズのフラフープをずらしてできる3区画）に、分けて置いていった（図1）。

◇意見が分かれる時は、それぞれの意見の発表を丁寧に聞き合うように促していた。

◇教師は色々な意見を受容的に聞き、どんな意見も否定せず、教師が結論を出すことはしなかった。

◇どちらかに決まらないときは、「両性のおもちゃや遊び」の区画に置く、というようにしていた。

- ③ 教師は「みんながそれぞれ遊びたいと思うおもちゃを用意したいと思っています。きょうは、みんな一緒に考えてくれてありがとうございます」と述べて授業を締めくくった。

1. [6年生の授業] 授業テーマ：雑誌広告の隠れたメッセージを探す

1) 授業案 [参観者配布用 (A4版5ページ) を筆者が和訳]

小学校6年生 雑誌広告の隠れたメッセージを探す

Bonnie Crook, Ben Peebles, Judith Kimel, Robin Shaw, Pria Muzumdar, Zoe Donoahue, Kelly Goorevich, Jillian Green, Shanti Harris, Karen Leung, Kimberly Way

クラス：ベン／リチャード学級（6年生、11人）[Ben/Richard Grade Six (11 Students)]

教師： Ben Peebles, Bonnie Crook

はじめに

子ども研究所における研究授業は、これまで、特定の数学的概念の深い理解や、数学的理論の証明に重きをおいていた。しかし、今回の授業研究は、従来の取組からの方向に転換を図るひとつの実験であり、今後の授業に適用される重要な議論の出発点となるものである。

今回の授業研究では、テーマに、私達の文化をとりあげ、それがどう形成されているかに目を向けることにした。このテーマはまさに現在進行中の現象である。研究では特に、社会的多様性について改めてきちんと理解することに焦点を合わせてきた。

出発点として雑誌に載っている様々な広告を取り上げた。雑誌広告は最新のものがすぐに大量に手にはいる。

私達が目にする広告情報は、何かが排除されたものであることが多い。このことが社会的多様性を理解する視野をせばめている。こういった、正確とは言えない情報が、人々の公正な理解を妨げている要因にもなっている。

私達の研究は、文化、民族、男女の役割、家族構成、身体的特徴などに関する見た目の違いや思い込みなどに関する社会的現実の実例を枚挙することから始めた。この授業はその1回目である。

6年生が、この授業のために選ばれた。

文献

Reading, Writing, and Rising Up; *Teaching About Social Justice and the Power of the Written Word*, by Linda Christensen.

授業：

教師の発言：

私達は皆、四六時中、メディアの映像や広告にさらされています。当然のことですが、広告は、広告主が、買って欲しい製品についてのメッセージを私達に向けて発しているものです。

しかし、きょう私達は、そのようなメッセージではなく、広告が持っているかも知れない他のメッセージに目を向けてみることにします。

テーブルの上に、いくつかの雑誌から抜き出したいろいろな広告が置いてあります。各グループでそれらに目を通し、次のいずれかに関するメッセージを発している写真があるかどうか、探してみてください。

- ◇ 文化や民族
- ◇ 男女の役割
- ◇ 家族構成
- ◇ 身体的特徴

各カテゴリーにつき少なくとも1枚は写真を見つけてください。見つけたら、グループ全員の意見が一致していることを確認の上、ボードのところに持ってきて、それがどのカテゴリーに入るかを教師に教えてください。教師はそれらをボードの該当箇所にテープで留めます。グループの1人はその手伝いをしてください。

※ 教師は、子ども達の活動をよく見ておき、もしそのカテゴリーを理解することが困難なグループが1つでもあったら、授業をストップして、用語の説明をする。

議論：

子ども達に、調べた資料は重ねて、そのままテーブルに置いておくように指示する。

子ども達に、各カテゴリーにその写真を選んだ理由について説明するよう言う。議論は、1つのカテゴリーについて1枚の写真、1つのグループについて1枚の写真とする。

それぞれの写真について、全体に尋ねる「この写真は私達に○○（カテゴリーの名前）について、何を伝えていると思いますか？

そのあと、子ども達を1つのカテゴリーに着目させ、次の質問のいくつかを行う。

- ◇ このカテゴリーで、何か共通性に気づきませんか？
- ◇ 反復されたり、強く主張されていることはありませんか？
- ◇ 広告では、誰が主役になっていますか？ 主役にならない人たちはいませんか？
- ◇ これらの写真に何か欠けている要素はありませんか？
- ◇ この広告で、あなたはどんなことに気づきましたか？ 何が分かりましたか？ 何が分からなかったですか？
- ◇ あなたの民族・性あるいは家族構成・身体的特徴が、今と異なると仮定してみてください。そのとき、あなたはこの広告に同じように反応しますか？ そう仮定してみることで、何がわかりますか？

活動：

教師の発言：

今からこれらの広告が発しているメッセージの全体について、より深く考察してみましょう。1人1人で考察して下さい。各人ボードから1つの広告を選び、ワークシートを1枚取り、その広告が○○（カテゴリーの名前）について、何を伝えようとしていると思うか、詳しく書いてください。その広告で分かることと

分からないことをできるだけ詳しく挙げてください。

子ども達にワークシートと鉛筆と消しゴムを渡し、テーブルに戻ってメッセージを書くように言う。教師は机間巡視し、子ども達1人1人が適切に活動できるよう支援する。

共通理解と討論：

子ども達に、何を書いたかとそれを書いた理由を読むように言う。教師は次のいずれかを質問し、まとめにつながるよう討論を支援する。

- ◇ そのことは、あなた(達)にどういうことを考えさせましたか？
- ◇ 広告の全てあるいは多くに共通していることはありませんか？
- ◇ これらの広告はどんな雑誌から取ったものだと思いますか？
- ◇ 広告を、普段見ているのと少し違った目で見ることの必要性についてどう思いますか？
- ◇ 私達は、広告が、文化・性・家族…などの多様性に関わるいろいろなメッセージを含んでいるのを見ました。雑誌広告以外で私達が同様のメッセージを受け取っている機会や場はないでしょうか？
- ◇ これらの広告のイメージは、私達の考え方に何か影響を与えてはいないでしょうか？

以下、参観の記録にお使いください

◇ あなたの近くのテーブルにおける子ども達の会話の記録メモ

◇ あなたの近くのテーブルの事例記録メモ

観察事項

1. 本授業の各段階における、子ども達の活動に取り組む熱心さ・真剣さの程度
2. 子ども達は、それぞれのカテゴリーをどのようにとらえているか？
3. どのカテゴリーが考え易いか？

2) 授業展開の概要

出席児童は11人であった。

- ① 一つのテーブルの上に、雑誌から抜き出したいろいろな「写真を主にした広告」が置いてある。子どもたち(11人)は3グループに分かれ、それらの広告から、隠れたメッセージ[a]文化や民族、b)男女の役割、c)家族構成、d)身体的特徴の4点のいずれかのメッセージ]を探そう指示された。
- ② クラス全体の場で、各グループが、その広告を選んだ理由を説明し、質問し合った。
- ③ ①、②を踏まえ、一人一人がひとつの広告を選び、それが発しているメッセージについて、ワークシートを用いて考察した。
- ④ クラス全体の場で、それぞれの考察内容を述べ合い、「広告の隠れたメッセージ」について議論した。
たとえば
 - ・ 広告に出てくる家族像として、白人の若い両親と男の子と女の子の形が多く、格好良く、かわいく、幸せに表現されている。実際はカナダには多くの人種・民族があり、家族にももっといろいろな形がある。
 - ・ 女性の服や化粧のイメージには、固定的でワンパターンなものが多い。実際はもっと多様である。
 - …等々、街で見かける看板など様々な場面も含め、広告に現れた、家族観、男女観、その他いろいろな価値観にかかわる「隠れたメッセージ」の例が挙げられていた。
- ⑤ 教師は、雑誌広告に隠されたメッセージを、子ども達に考えさせることにより、社会的多様性についての理解を深めていこうとしていた。

おわりに

本報で報告した2つの授業実践(小学校2年生と6年生)は、いずれも近年着目されている“隠れたカリキュラム”にかかわるものと捉えられる。

カリキュラムと言えば従来は、意図的に設定され文として明示される学校教育の内容を指していた。しかし近年は、「当たり前のこと」として特に意識されず明文化もされないまま用意される学校環境や慣例も、大きな教育機能を果たしていることに“隠れたカリキュラム(潜在的カリキュラム) hidden (latent or covert) curriculum”として目が向けられている(Jackson 1968, イリッチ 1977・1979, 高旗 1998, 安彦 1999, 田中 統治 1999, 田中耕治 2005, 荻谷 2005, 笹野 2011 等)。なお、隠れたカリキュラムに対し、従来の意味でのカリキュラムは、顕在的(明示的)カリキュラム explicit (overt or manifest) curriculum, あるいは意図的カリキュラム intended curriculum、書かれたカリキュラム written curriculum などと呼ばれている。

さらに、“隠れたカリキュラム”は、学校だけでなく、子ども達の生活の舞台全てに存在していることも指摘されている(瀬川 2008・2009, 古田 2015 等)。

以下に、2年生の授業テーマである、男らしさ・女らしさの捉え方と“隠れたカリキュラム”とのかかわりについて、筆者の考えを述べる。

前述のように、小学校2年生の授業に先立つ調査(対象:4歳児~小学校高学年)において、どの学齢でも、おもちゃのいくつかをいずれかの性のものと捉えていたことが述べられている。日本での調査においても、子ども達の言動には、幼児期から、彼らなりの男らしさ・女らしさの捉え方が認められる(青野 2008, 藤田 2009)。

一般に、動物における“男らしさ・女らしさ”は、生殖に直接かかわる第一次性徴と、そこから派生する第二次性徴が、形態にも行動にも認められる(広木 1974 等)。おもちゃに対する子ども達の捉え方には、先天的なもの(人間が動物として持つ第二次性徴的なものと、性とは特にかかわりのない個人的なもの)、および後天的・社会的に、すなわち生活環境の“隠れたカリキュラム”の影響を受けてつくられたものがあると考えられる。

問題は、男らしさ・女らしさが、個人の自由な感じ方を拘束する枠組として後天的・社会的につくられていくことだと言えよう。氏原(1996・2009)、木村(1999)、青野(2008)、藤田(2009)らは、保育園・幼稚園・学校やその内外の子ども達の生活環境における“隠れたカリキュラム”が、この枠組の形成に果たす役割を指摘している。

仮に、人形遊びの好きな女の子が男の子より多く、自動車遊びの好きな男の子が女の子より多い、という傾向が観察された場合でも、それは、結果(恐らく第二次性徴など先天的な要素と後天的な社会的要素の組み合わせだった結果)としての傾向であり、実際は個人個人様々であるという事実(恐らく先天的な要素と後天的な要素の組み合わせが多様なためであろう)を、互いに率直に受けとめられるような“人間観”の育みが大切だと思われる。「男らしさ・女らしさという枠組」の形成を促す“隠れたメッセージ(カリキュラム)”の存在に子ども達自身が気づいていくことは、そのような“人間観”を育んで行く上で有意義だと考える。

“隠れたメッセージ”の存在や影響自体については、前述のように多くの指摘がなされている。ただ、子ども達自身が“隠れたメッセージ”に目を向ける授業に筆者が出会ったのは、この訪問が初めてである。

本稿で報告した2つの授業は、子ども達が、自分達の先入観や固定観念をメタ認知的に捉える目や、意図的・一方的に与えられる情報を単に受動的に受け入れるのではなく、子ども達に生活環境の“隠れたメッセージ(カリキュラム)”にも目を配れる主体的・批判的な見方・考え方を育む授業事例として注目される。総合学習などの授業づくりに大いに参考にしていきたい。

本調査において、計画立案にかかわるコーディネーターと現地案内および通訳について助力をくださった千々岩みどり氏と Yoko Gallozzi 氏、研究授業を快く参観させてくださった Elizabeth Morley 氏(校長)、Annie Chern 氏(Co-ordinator)をはじめとするトロント大学附属実験学校の方々に、厚く御礼申し上げます。

なお、本報は、科研費補助を伴う研究の報告書(広木 2009)で報告した情報の一部を整理したものである。

本報では授業案を和訳して示したが、報告書には、原文(英文)も掲載した。

文献

- 安彦忠彦 (1999) カリキュラムの評価的研究. [安彦忠彦 (編著) 新版カリキュラム研究入門, 勁草書房発行, 260pp] pp.181-207 (第7章).
- 青野篤子 (2008) 園の隠れたカリキュラムと保育者の意識. 福山大学人間文化学部紀要 第8号, pp.19-34.
- 藤田由美子 (2009) 幼児期におけるジェンダー形成と子ども文化. [木村涼子(編著) ジェンダーと教育 (リーディングズ 日本の教育と社会 第16巻), 日本図書センター発行, 442pp], pp.90-106.
- 古田雄一 (2015) アメリカの貧困地域における子どもの市民性形成をめぐる環境的課題 -学校・地域におけるシティズンシップ教育の機会格差と隠れたカリキュラム. 学校経営学論集 (筑波大学学校経営学研究会編), 第3号, pp.12-20.
- 広木正紀 (1974) アルテミアの走光性行動にみられる性差と"集団効果". 動物学雑誌 第83巻 第1号, pp.83-90.
- 広木正紀 (2009) カナダ. [広木正紀 編著 (2009) 2007(平成19)年度～2008(平成20)年度 科研費補助を伴う研究の報告書「探究学習と環境学習を柱とする小・中学校理科カリキュラム編成を目指す教材群の開発」], pp.79-110(第II部 第2章).
- 広木正紀 (2015) カナダ オンタリオ州の小学校訪問から学ぶ (1) -図書教育と算数教育の事例. 京都教育大学教育実践研究紀要 第15号, pp.53-62.
- イリッチ, I.D. 著、東洋・小澤周三訳 (1977) 学校の現象学. [脱学校の社会. 東京創元社発行, 232pp], pp.58-72(第2章).
- イリッチ, I.D. 著、松崎 巖訳 (1979) 学校をなくせばどうなるか [イリッチ, I.D. ほか(著)、松崎 巖(訳) 脱学校化の可能性, 東京創元社発行, 218pp], pp.7-35.
- Jackson, P.W. (1968) Life in classrooms, Holt, Rinehart and Winston 発行. (隠れたカリキュラム hidden curricula については Chapter 1 「The daily grind」の第V節に述べられている)
- 自治体国際化協会 (2007) カナダにおける義務教育制度の概要. 2007(平成19)年1月10日 (財)自治体国際化協会編集・発行. 129pp.
- 荻谷剛彦 (2005) 隠れたカリキュラム. [学校って何だろう -教育の社会学入門-, 筑摩書房発行, 248pp], pp.121-143(第5章).
- 木村涼子 (1999) 学校の中の〈かくれたカリキュラム〉. [学校文化とジェンダー, 勁草書房発行, 274pp], pp.67-93(第3章).
- Ontario Ministry of Education (カナダ オンタリオ州) の教育省ウェブサイト内. About the Ministry, Volume II: Learning - Our Vision for Schools . Chapter 8: The Learner from Age 6 to 15: Our Common Curriculum. <http://www.edu.gov.on.ca/eng/general/abcs/rcom/full/volume2/chapter8.html> (最終閲覧: 2015年11月30日)
- 笹野恵理子 (2011) 子どもは学校音楽をどう経験するか -潜在的カリキュラム研究の視角から. 季刊音楽文化の創造 第60号, pp.34-37.
- 瀬川武美 (2008) 「隠れたカリキュラム」の考察(その1) - 1960年代以降の大人の意識・精神性. 帝塚山学院大学研究論集. 文学部 第43集, pp.39-87.
- 瀬川武美 (2009) 「隠れたカリキュラム」の考察(その2) - 幼児期の環境、大人の意識変革を. 帝塚山学院大学研究論集. リベラルアーツ学部 第44集, pp.31-53.
- 高旗浩志 (1998) 学校知に表れているもの・隠れているもの. [安彦忠彦(編著) 学校知の転換 -カリキュラム開発をどう進めるか- (学校変革実践シリーズ 第4巻), ぎょうせい発行, 255pp], pp.117-140.
- 田中耕治 (2005) 社会における教育課程. [新しい時代の教育課程, 有斐閣発行, 325pp], pp.215-240 (第7章).
- 田中統治 (1999) カリキュラムの社会学的研究. [安彦忠彦 (編著) 新版カリキュラム研究入門, 勁草書房発行, 260pp] pp.65-86 (第3章).
- 氏原陽子 (1996) 中学校における男女平等と性差別の錯綜 - 二つの「隠れたカリキュラム」レベルから. 教育社会学研究 第58集, pp.29-45.
- 氏原陽子 (2009) 隠れたカリキュラム概念の再考 - ジェンダー研究の視点から. カリキュラム研究 第18号, pp.17-30.